

## 学会史

### 日本応用心理学会のあゆみ (その 1)

—古賀行義先生にきく日本応用心理学会のことはじめ—

#### MEMOIR ON THE HISTORY OF THE JAPAN ASSOCIATION OF APPLIED PSYCHOLOGY

Yukiyoshi KŌGA

児玉(省) 前の応用の話は先生が非常に詳しいから……

古賀(行義) 詳細に調べる暇がなかったんですが、応用心理学の創成期をお話します。どうしたはずみで始まったか。はなはだ潜越ですが自分の経験を中心として初めましょう。僕は大学を卒業して、初めて名古屋高等商業学校の先生になったんです。

児玉 卒業はいつですか。

古賀 大正9年です。その頃、文部省に実業学務局というのがあって、その局長をしていた山崎達之輔という人がいました。彼は後でちょっと文部大臣にもなったんですが、僕の飯田町の下宿の近所にいた。そして彼の配下の属官に僕の高等学校時代からの友人がいて、そいつが、彼の所につれていってくれた。そこで、お前は大正10年に創立される名古屋の高商に行ったらという話になったのです。というのは、僕は、大正4年に心理学を卒業して大学院に二年籍をおいていました。その頃は大学院だけの講義はなく、一般の講義を大学院の学生と一般学生も選科生もまじえて相当の人が出たものです。僕が一般学生だったとき、新任の松本亦太郎先生の講義をきくために30人位集まったでしょう。その内僕と同窓の学生は9人おった。良い所へ就職するのが難しかった時代です。大学院は二年で一応満期でしたが、また何度でも入学できるんです。二年が終わればまた二年と切り替えて何年いても良いわけです。そういうことを繰り返して長く勉強していった人がたくさんおりました。松本先生が初めて京都大学から東京大学へ来られて東大で講義を始められた。前にも講師で来られたことがあったようですが、元来は高等師範の先生だったんです。松本先生が京大から来られたのは私は大学に入学した翌年で大正2年4月でありまして、丁度その前年の12月に元良先生が亡くなられたのです。昔は9月から新学期が始まりまして、僕が心理学教室に出入りするようになった時には、元良先生は丹毒で入院されておりました。僕は一ぺんも

先生の講義を受けたことがない。その間、第一高等学校の心理・論理の先生が後の京城大学の総長になった速水澁さんが一講師として心理学の講義に来られた。それからその11月末か12月初めに元良先生が至極重態になられたので自分は講義する気がしないから休みにするといわれたことを覚えています。

元良先生の在職当時に僕は入学しましたので元良会にいつか加えられていた。そこで元良先生の墓参会というのが毎年祥日命日前後にあり昔からやっていて最後に先生の生誕百年祭が学士会館で催され、そこで元良先生の娘婿の東北大にいた高橋穰さんが「元良先生の心理学」という題で講演をやられた。その時に旧制新潟高等学校長をしていた八田三喜さんとか桑田先生とかいるんな人が来られたんです。先生の墓参会にも小熊君に誘われて僕は何度か行きました。小熊君は先生の最後の弟子です。僕は直接講義は聞かなかつたけれど、小熊君は長らく聞いています。旧女高師教授菅原教造さんは老疾で見かけなかったようです。文学部の美学美術史の助手で後の美術大学長、明治大学教授だった上野直昭さんなんか最後の墓参会に集まった。児童心理学の高橋惣三さんなんか元良先生の弟子です。元良先生の弟子達も多く亡くなるか、ねた切りの老人になられて最後の墓参会は寂びしかった。現存しているのは小熊さんと僕位なものです。それでその間の話は省いて、松本先生の時代に元良先生の旧弟子の方々が松本先生の新しい講義をきくために大学を出た大学院在籍の連中がやってきた。20~30人ぶらぶらしてみんな内職で中学校の英語のリーダーの先生をしていた。—その頃、就職口がなくて内職専門でまだ現代的意味でのアルバイトという言葉はなくアルバイトと言えば研究的成果を主として指示する言葉として用いられた。高等学校の先生になるということは非常に出世だった。増田惟茂という当時の有名な学者がいて京都の三高の教授に推薦されたが、頑として受けなかった。その人はぶらぶらして僕がまだ教室に出入りし

ていた時分に初めて助手になった。僕はよく増田さんの試験台になった。いろいろ教室のいままで余り使わないような器械の取扱いをやったわけです。クレベリンの圧量計測器（デュルグワーゲ）による筆圧の測定、あるいはヒップのクロノスコープのコントロールハンマーというのがある。ヒップの時間を訂正するために。そういうものの扱い方を増田先生といっしょに試みました。増田さんの前に助手だった大槻快尊という先生がおられまして、また後で話が出て来ますが、僕が卒業する頃増田さんと代り助手として土井壮良という年輩の人がいた。大槻さんは京都の勸学院の院長になられた。ある時僕は夏休みに熊本に帰る時に京都で降りて、黒田源次という郷里の先輩、その人は京大心理学の最初の卒業生の一人でパブロフの条件反射の研究をやっているのものでその研究を見に行った。

石川日出鶴丸という京大の生理学の先生がおられましたが、その先生が二度目の海外留学からロシアを回って帰ってきた。その途中パブロフに会ってパブロフの実験を見て、それから京都の生理学教室でそれを追試する計画を立てた。それについては助手がいる。そして黒田さんがその条件反射の研究をするという条件の下に生理学の助手になった。それを何年かやっている間に生理学の講義もやったらしいですが、制度として医科大学を出ていない以上は講師にはなれても助教授・教授になれないんです。それで、奉天に南満医学堂という大学に行って生理学の教授となられました。なお黒田源次氏についてはいろいろおもしろい話があるんですが……本題から大いに脱線することになるのでやめにいたします。その黒田さんと一緒に大槻快尊さんの所に遊びに行きました。その大槻さんは東大心理学の助手をしている間に実験心理学という大きい書物を書いた人であります。人生の遭逢は中々おもしろい。その大槻さんに関西応用心理学会を組織化するに大に援助していただいたのです。

僕が経済学部に入っている間に高等学校の増設があった。ナンバースクール高(東京)二高(仙台)三高(京都)から八高(名古屋)までありまして、その後地名をつけた松本高等学校あるいは大阪高等学校、広島高等学校、水戸の高等学校などが新たに増設された。僕は今のままの状態ではとても高等学校に就職できない。だから経済学部にも再入学しました。どこかの研究所、例えば満鉄の研究所でも使ってもらおうかと思っていた。初めから企業体や会社に入る希望はなく、とにかく学校の先生か研究所に入るという計画で経済学をやった。前にお話ししたようにたまたま山崎という文部省の局長に話しまして、紹介されたのが名古屋高等商業学校長に内定されて

いた渡辺龍聖という人で、かつて音楽学校の校長や、小樽高商の校長であり、またドクトル・オブ・フィロソフィーでコーネル出身で、また日本の文学博士でもあった。コーネル大学の心理学教室ではティチナーが主任教授でありピルズベリー(Pillsbury, W. B.)はその門下でミシガン大学にいました。渡辺校長の友人であります。僕が大正10年にアメリカに行く時に渡辺校長から特別の紹介状をもらった。そして先生の心理学史のゼミナーに出たばかりでなく応用心理学の二、三を聴講した。

話が横道にそれましたので、本筋にかえしますと、僕が経済を3年を終えて出たら高等学校はみんなふさがってもう一つもない。新設以前の高等学校は論・心理がひとつの単位であわせて一年間の授業であった。それで心理学者でなくても良かった。哲学者でも社会学者でも哲学科を出ていれば心理学も教えられたが、新設と同時に心理学は必要な科目だということで、通年の独立の科目となったばかりでなく、文理ともにその講義を受けねばならぬことになった。従って心理学も兼任では困る。哲学科出身では困る。心理学出身でなければだめだということになった。前にお話ししたように僕は経済学部を出て、見渡して見ても高等学校の心理学の教職は一つもない。幸い高等商業はまだ残っていました。

渡辺校長さんがどういう科目を受け持ちたいかと聞かれた。「私は心理学が専攻で、経済はやむを得ずやったようなものです。それで経済関係の学科については何も詳しいことは知りません。しかしやれとおっしゃるなら今から勉強します。」と言った。僕はさらにこうも言った。「しかし先生、心理学と経済学を一緒にしたような科目が近頃はやってきているようです。アメリカの色々書いた物を見ても産業心理学というのがあります。職業心理学というのもありますし、広告心理学というのもあります。多く大学の科目に入っています。そういうものをひとつ新設の名古屋高商で創設されたらどうでしょう。」と言ったんです。

渡辺校長は本来は倫理学のPH・Dであります。先程お話ししたピルズベリーと同級であります。そしてマイナーとして心理学の実験もやった。(ヴントの反応時間の追試をしたこともあります。)そこで心理学にも多少理解があるので「それはおもしろい、ひとつそれをやってみないか」ということで商工心理学一後で産業心理学と直したのですが一をやることになった。

高商にはどこでも商品学というのがありました。名古屋高商では「商品鑑定学」があって商品の物理・化学的鑑定の実験をさせる。商業と工業を一緒にしなくてはならないというので渡辺校長はそこに名高商の特徴を出

そうとされた。それにならって産業心理学の学科と実験室を作る計画を立てたのです。そこで君は早速アメリカへ行ってくれということになったが、産業心理学をやるにしても創設期で直ちに始めるわけにはいかない。丁度法学の先生がまだいなかったので一学期間だけ法学通論を教えてくれということでありました。

第二学期になって法学の先生も来られたので、私は大正10年10月10日にアメリカに向けて出発した。ちょうどその一ヶ月前に上野陽一さんが労資協調会から行かれたので、向うでお世話になりますのでよろしくと頼んでおいた。上野さんはだいたい先輩として明治の末年に通俗心理講演会を年6回位、教室の連中と始められ、後に心理研究という雑誌を出していられました。それは僕が高等学校の2年か3年の頃、明治43、4年頃に月刊として始められたのです。研究的なものもありましたけれども、「女義太夫の身振りの研究」なんてなかなかおもしろいものもありました。国会図書館には勿論あると思いますが、個人としては共立の玉岡教授がそろえて持っていると思います。

第一回の世界戦争後、ドイツから日本に移籍した大洋丸という汽船でサンフランシスコに渡り、パークレーに暫く滞在して、そしてシアトルの領事館に私の友人がいて、シアトルへ来いという無電を太平洋で受け取りましたので、他の同行の人々と別れて一人シアトルに行き、クリスマスから正月を終えてシカゴに行きました。(僕より4、5ヶ月遅れて、東京高師の田中寛一さんと教育学の篠原助市という先生が来て僕の下宿のあとにはいった。)シカゴでは僕は上野陽一さんの下宿を引きつぎ先生は着いたばかりの私を引きまわし、見学するところを指示して、その夜おそく東部に向けて出発された。そして3、4ヶ月後に私が移籍していたミシガン大学のあるアチャーバーやデトロイド(フォード自動車工場のある)を見学されました。デトロイドで丁度そのとき、科学的管理法を信奉する能率技師(Efficiency Engineer)の大会があり、上野さんに続いて、シカゴに着いたばかりの田中寛一さんと私とがその会に出席することになったのです。ギルプレスやエマーソンなどとフォード工場を見学。晩餐会の席上、上野さんは一席ブツて、大衆の大拍手をあげられたのであります。上野さんは科学的管理法についてテーラーやギルプレスを、日本に紹介された最初の一人で、テーラーはすでにその頃は亡くなっていましたが、ギルプレス夫妻とは、心安くしていられたのです。能率技師の仕事を紹介した上野さんの功績は偉大であったというべきでしょう。専門学校の教科目としていたのは私の発言を採り上げた渡辺校長

の功績というべきでしょう。いま産業心理学をひとつの教科目としない大学は殆どないと言えないでしょうか。あとでニュー・ヨークで上野さんと会うことになりましたが、すぐにヨーロッパに旅立たれて、10ヶ月後には日本に帰られたとおもいます。芝公園にあった労資協調会の能率部長か何かの仕事で多忙であったとおもいます。上野さんが日本を留守にされた頃、増田幸一君が、心理研究の編集をしていたとおもいます。上野さんは帰朝後、協調会から「能率研究」という雑誌を出され、心理研究はいつか消え失せることになった。心理学も大に発達して専門的雑誌の出版が必要となったからであるとおもいます。私は2、3ヶ月ミシガン大学に止り、田中さんと一緒に各大学をまわってニュー・ヨークに出で、コロンビア大学の夏期大学に出てポッペンベルガーの応用心理を聴講しましたが、面白くないので欠席がちでしたが、そこでピッツパークのカーネギー・テクのサーストンの助手に会い、ピッツパークまで行って若い日のサーストンに会う機会を得ました。米国滞留約一年して、田中さん達と英国ロンドンに行くために大西洋を渡ったのです。

ロンドンでは暫く田中さんと同宿したのですが、暫くして田中さんは実験をするためにオックスフォード大学の生理学教室に行き、わたくしはユニバシチ・カレッジのゴールトン研究室にはいり、K. ピアソンの指導の下で、ゴールトンの人体測定学的資料の整理にあたり約一年その研究にあたり、大学の休暇を利用してイタリアやスコットランドに旅行しました。僕がユニバシチ・カレッジのC. スピアマンを訪ね、またゴールトンラボラトリーのピアソンのところに止ったものは、当時日本における数量的取扱いについて、多少疑問をもっていたからです。理論的にはともかく心理学の応用に多少とも貢献したいと思ったのです。というのはその当時は応用心理学という一段下に見られる傾向があったし、アメリカなどでも実践的心理学も、金もうけの心理学と考えられる傾向が一部に存在すると Mckeen キヤッテルなども慨嘆していました。松本心理学は理論よりもより応用面に結びつき、応用心理学的発表が期待されるようになりつつあったので、とくにこのことを述べておきたいとおもいます。

大正12年8月私はロンドンでの仕事を一応終るとフランス・スイス・オーストリアを通過し、チェコスロバキアのプラハを経て、ドイス、にはいりドレスデンからベルリンに行きました。スイスのチューリッヒで、東京の地震の話を見、新聞紙上で見て、心細く、はやくベルリンについて、詳しい情報を得たいとおもいました。当

時のドイツはインフレーションの風に吹きまわられていて物情騒然たるものがありました。多くの学者はそれでも、種々理論的にも実験的にも勉強していました。一方において形態心理学が風靡し、実際的には応用心理者のループが精神技術学雑誌を出し、メーデは実際心理学雑誌を出して、種々な研究論文を発表し、またウルツブルグのマルベも応用心理的方向に向っていました。同行した田中さんは、はやく帰国されましたが、私は留学期限をのり越すこと半年ばかりして大正13年3月末に帰りました。私が帰国する前に佐久間・小野島両君が、ベルリンにきて、形態心理学者の指導をうけたのです。

日本にかえて名古屋高商に、心理学関係の機械・道具を整備し、商品陳列館の一階に大小5、6の実験室をもつ研究室を作りました。そして最終学年に産業心理学を講義し、希望者に実験演習・統計方法や計算機の使用を教えました。それでは一人前の持時間にならぬので英語の書物によって現代史の講読や人事管理法を教えることになりました。

昭和2年になって日本心理学会が初まるころ、それと前後し当時京大に野上俊夫先生の外に岩井勝二郎君がいました。テストがやはり出していた。丸山良二君は田中寛一さんの弟子で田中さんの下で田中知能検査法の大要を作った。その後には彼は名古屋の児童研究所に赴任して来た。京大の岩井君が京大関係者のほかに丸山と僕と八高の楠君などに連絡してテストを持ち寄って互いに欠点や長所を批判しあう会を作ろうということになった。そしてその会合を関西応用心理会と名づけ正式の学会というわけでないが、第一回は京都でということにした。第二回は神戸、そこに田中政太君がいて神戸の児童相談所、第三回は名古屋高商でやった。その時僕は先輩の後援を得て宣伝のポスターを作った。大槻快尊さんが京都の勸学院の学院長をしていたが、名古屋の大須観音という名で有名な真言宗のお寺の住職になって来名されて間もない頃であった。その大槻さんが声援してくれた。伊藤裕式さんという前に東海中学の校長をしていた人が名古屋高商に学生課長として任命された。この人は前の名を鶏飼裕式さんと言って、心理研究に女性の研究という論文をのせたりしていたので私の姓名だけは知っていた。伊藤さんの兄さんが名古屋市の教育課を牛耳っておられた。そんなことで伊藤さんに色々指導してもらった。それで関西応用心理学会は名古屋で学会の形式を整えた。野上京大教授の外に大伴君や岩井君も来た。心理学に興味あるような人がみんな集った。新聞にも広告を出した。学会のポスターも作った。研究発表は正式に名古屋高商の講堂でやった。市中で通俗講演会を開いた。京大

の野上先生、岩井勝二郎やスポーツの心理学をやった中村弘道君が東京からきて講演した。

その後大槻さんは御寺を会員の宿泊所として提供され、また伊藤さんのお陰で名古屋の教育会が後援していくらの金を出してくれたのです。講師にも金一封のお礼を差し上げることができた。名古屋に愛知教育という雑誌があり、その一卷を通じてその会合の報告と講演の記録を出した。それが第3回関西応用心理学会で、何回かは忘れましたが、京都大学出身の前川誠一というのが兵庫県の児童研究所の所長をやっていて、そこでもやりました。京都で二度目にやった時は東西合併の応用心理学会という名目でやった。たくさん研究報告がありました。それから倉敷、奈良、大阪でもやった。昭和6年に第10回関西応用心理学会を名古屋でやった。昭和5年に僕は広島に行ったので、宇都宮君が主宰した。それから広島でやった。名古屋と広島の間が関西応用心理学会の領域だったのです。12回位までやったと思うんですが、東京はずっと遅れている。1回は東大航空研究所で、第2回は日大でやった。東京で2回をやる時分に関西では10回やっていた。何れも、春、秋と2度やっていたんです。も一度くりかえしますが関西の当番校は大体次のようだったと思います。第1回京大、第2回神戸児童相談所、第3回名古屋高商、第4回神戸高商(神戸商大)ハーバードでミュンスターベルヒの講義を受けた小川忠蔵さんがいた。浪速高等学校に正木正さんがいた。大阪能率研究所に伊藤熊太郎さんという人がいた。奈良女高師に本庄さんがいた。京都は野上さん、岩井さんがいた。兵庫県立児童研究所所長は前川誠一君、第9回が倉敷、労研桐原茂見君がいた。第10回が昭和6年に名古屋高商、(宇都宮教授がいた)でやった。その頃暫く日米関係が緊張した時代です。アメリカの軍艦がハワイまでやって来て日本に脅威を与えるという事件があった。それで戦争か平和かというクエスチョネールをサーストーンが作って、それをデンバーの大学生を使ってやった人がいる。それを広島で翻訳して大学生を使ってやってみた。広島とデンバーはほとんど同じ位の人日だったのです。その比較をしてみたら日本の方がより好戦的であった。(もう1回戦争か平和かという戦争中に東大での日本心理学会か応用心理学会かがあった時やったら、極端な戦争論、平和論が少なく、中庸を得た所が高くなったと報告された。)そして今度は応用心理学会の東西連合会を京都でやり、更に11年同様な合併大会を広島大学でやった。(学長塚原正次)その時久保良英教授が合併大会を止めて日本応用心理学会ということに改め、次回を東京でやる提案を出しての賛成を得た。元来、日本心理学会は隔

年にやるということになっていたのその間に日本応用心理学会が介入することになった。応用心理学会といっても必ずしも応用的な問題ばかりではなかった。理論がかった問題もその中にあった。どこまで応用か、どこまで理論かの区別は難しい。それで要するに毎年、心理学の会が行なわれるかたちになった。ことに戦争になってから統合傾向が種々な方面で強力となり、学会もその例外ではないということになった。この間にいろいろ論議がありましたが、日本の心理学会一本になってそれが北海道・東北・近畿・中国・四国・九州と部会を設ける総会になった。それで自然に応用心理学会は消滅することになり戦後新たに復活することになったかと想像してよいかと思います。

その前に、昭和10年春だったかに東京教育大学で日本心理学会をやった時の理事会で次の会合はどこでやるかということになった。その時に速水先生が、自分はもう総長をやめて日本に引き上げる覚悟だから、最後の思い出にひとつ京城でやってくれと言われた。京城はいかにも遠くて一泊ではだめだ、と渋っている人もあるし、それで一方では広島大学の学長の塚原政次先生が、先生は心理学者の大先輩の1人であり、自分の方でやってくれというような話を久保さんが承っていた。(その時は塚原先生は学長であり、多忙で出席されていなかったのですが)、要するに広島か京城かという話になった。話がなかなか決まらず、塚原学長の意向もあるので久保教授がじゃあ広島でしようということになって、広島をおした。ところが半々で決着がつかない。京城半分、広島半分ということになって、二度投票したが同じ結果になった。そこで僕は考えた。「広島大学がまだ新しく、卒業生は東京の人をあんまり知らないし、東京の様子もあんまり知らない。宿屋の世話からしなくちゃならないし、なかなか困難だろう。」と。そして久保先生は主任教授で、先生のやる仕事は僕がやるか、学生がやることになる。だから引き受けたら大へんだということと、朝鮮の未見のところに出張しても見たい個人的希望も持っていた。それで最後の投票のときに僕は京城に入れた。その1票の差で京城に決定した。

広島に帰ったら、塚原さんから怒られた。僕の在任の間に、日本心理学会を広島でやるということは不可能になったと残念がられた。それで私は先生、来年ここで東西合併の応用心理学会をやりますから勘弁して下さい。日本心理学会と同数位の人が集まります。速水先生も桑田先生も、松本先生も恐らく来られるでしょう。と僕は言った。その前に東西合併の応用心理学会を、京都でべんやりましたが、二度目の合併会を11年に広島でやっ

た。その時、松本さんが来られたかどうかははっきりしませんが、その前の時かも知れませんが、関西応用心理学会を一回前にやったことがある。おそらくその時だったでしょう。松本先生の特別講演「物心をめぐる心理学の動き」という題で、先生が話をされた。松本先生が外へ出られることはそうなかった。広島なんか初めてということだった。それで僕が案内して広島の名所や山陽の遺跡をいろいろまわった。先生の暇な講演の合い間に案内したんです。またその時時ミステリーシップというのを出したんです。広島文理大にごく近い海岸から船を出して、広島七つの川のひとつの先端に山文という料理屋があって、そこに皆を招待して心理学会の懇親会を開いた。山文は頼山陽がよく遊びに行った所で「白魚あり」という山陽が書いた看板が今でも残っていると思いますが、昔から山陽の「しらうおあり」という看板で有名なところですよ。

そしていよいよ12年に我々は京城に行った。渡辺徹先生なんかもその時見えた。渡辺先生と同輩の高木市之助という国文の先生も見えた。停年になってから日大でも講義された。

東京では応用心理学会という名で、日大の渡辺徹さんや淡路田次郎君の計画で開かれています。「応用心理」という広島文理大で出した創刊号第1巻(昭和6年)に出ています。(久保良英編集・南光社刊)それを見ると東京の応用心理学会は第1回を東大航空研究所で、昭和6年6月14日、思想調査及び児童の個性調査法を問題とする諸氏の報告と論議があり、第2回は同年10月25日、日大心理学教室で、個性調査票を問題とし、2、3の部会に分れて報告や批判が行われたと書いてあります。

東京で第2回が開かれた時に、関西ではすでに第10回を名古屋高商で開催している。関西でも東京でも春秋2回やったんです。

高良トシ子さんなんか、松本先生が丁度病気でおられないで、こういうお互いに意見のくい違いがあるのは残念だ、と泣き出した事件があったのは広島で東西合併を改めて、日本応用心理学会として東大でやったときで、その名称がまだ熟せず東京で種々の議論があったときだったと思います。従来、関西応用心理学と東京が合併する時は、関西は関西応用心理学会という名前、東京はただ応用心理学会という名称なんです。そうすると関西は自然と包含されるわけです。そこで特に注を入れて、東京としてカッコをして応用心理学会と書いた。関西は正式に関西応用心理学会と僕はプログラムを作った。そういうことを覚えてます。そして段々と戦争に

なりまして、前にのべたように心理学会は分解いたしました。昭和15年には、陸海軍の囑託として傷痍軍人の職業指導が始まりました。大阪で会合したり、東京で会合したりした。僕が毎日、広大から帰る時、門に立って見ていると、宇品から上陸する傷痍軍人は学校の前を自動車に乗って通って、広島病院にまず入れられる。そして各地の陸軍病院に分配されるのです。その際初めは心理学者ばかりでなく外部の人間が、軍の病院の中に入って色々な観察をするということは、厳禁されていた。どうしても入れてくれなかった。そこで僕は特に願って、左手を失った、あるいは右手を失った人に左手で文字を書かせるような学習の実験をやりたいからと、病院長に申し込んだ。そうした研究は広大の古浦一郎が実際やったが、初めはなかなか受けつけなかったが後では協力してくれた。

陸海軍の囑託として、傷痍軍人の職業指導というものが、厚生省で始まった。僕は学校で傷痍軍人が通っているのを見ると、みんな夏の暑い時に惨憺たる有様です。これはもう何とかしなくちゃならんと、松本先生に手紙を書いた。我々も心理学者として、傷痍軍人の問題に対してはできるだけのご奉公をしなればいけないと思いますが、いかがでしょうか、と松本先生に手紙出した。そしたら松本先生から返事が来て、そういう動きは東京にもある、だからいずれそういうことで相談する機会が生じるだろう、と書いてあった。というのは渡辺徹さん達が、すでにどこかで集まってやりよったんですね。それであとで私は陸海軍・厚生省の囑託として、義足義手のメーカー、職業紹介所長、心理学者の三者と、陸海軍の補導官とがいくつかの班を作って陸海軍の病院を巡回したのです。僕の担当は山陰、山陽、四国、九州だったんです。で、鹿児島まで行ったことがあるんですよ。丁度鹿児島へ俳優の栗島すみ子が慰問に来ていた。そこで会ったことを覚えています。それから16年に海軍潜水学校医学部に招かれて、潜水艦長候補者の心理学的な選抜資料を提出するようにとのことであった。広島大学の器械をみんな持って行って、ひとりひとり個人検査をやったわけです。学生をつれて行った。学生は喜んだ。海軍に行くと、おいしい飯をごちそうになれるでしょう。ピーフステーキのこんな大きい奴が出てくる。そうしたら学生は喜んで、何度でも僕を誘う。僕は部内勅任官待遇でね。自動車が黄色い旗をつけて迎えに来るんですよ。陸軍中将担当官だった。潜水学校の玄関まで行くと、専任将校が自動車の窓を開けて敬礼する。ちょっと得意だったね。

それから昭和23年から昭和30年まで家庭裁判所の調停

委員をやった。ということが何で分明するかということ、マッカーサー指令部の命令で、自分の研究発表をしたものを、みんな書いて出さなくてはいけなかった。その写しがここにあるんですよ。

何のためにそんなこと、お話するかということ、司法省関係の仕事ことに少年鑑別所。家庭裁判所・刑務所・県市の児童相談所など、いろいろの機関に心理学の応用範囲が拡張されにいたった事情の一端を明らかにする機会を、私の履歴から窺っていただきたいと考えたのであります。それから終戦後の教職員の適格検査について、私の関係したところをお話したのですが、それは特別に関係ありませんので省略いたします。

まあ、私の話はこれ位で終わりにしますが、応用心理学の、今度はメンバーを新たに、「応用心理学研究」という新しい雑誌を出していくということは、非常に嬉しいことと思います。僕等は初め広島にいた時、応用心理という月刊誌を有光社という所から出してもらった。そして有光社から断られて、中文館という、久保さんの書物をたくさん出した所ですが、そこで引き受けてもらって、応用心理学研究という雑誌を5、6冊、昭和14年頃まで出したでしょうね。それは研究的なものだったのです。しかし久保さんは17年になくなり、原爆で教室は続々と停止され、雑誌を出すことも出きませんでした。この度新しくスタートする、応用心理学と中心とした「応用心理学研究」が出るのは結構なことであると、その将来を祝福して、私の話を終ることにします。

清宮(栄一)先生、ちょっと最初聞きそなったのですが、第1回に京都大学の岩井先生の所からテスト批判ということでスタートしたという話になりましたが、それは何年頃ですか。第1回とは。

太田垣(瑞一郎) 関西産用心理学会と名付けられて京都で行なわれたのが……。

古賀 初めはテストを持ち寄って、ひとつ相談をしようということが動機だったのです。そうして同志が集まった結果として関西応用心理学会としようということになったのでしょうか。それが昭和2、3年のことです。

堀内 それから関西と東京と合併して、日本応用心理学会となったのは何年ですか。

古賀 初めから日本応用心理学会という名前はつけてないですよ。いずれも独立で、合併ですよ。はじめて京都でやったことがある。そして昭和11年に広島で東西合併の会をやったとき、日本応用心理学会の提唱が行なわれたのです。そして次の会を昭和13年に東京大学で「日本応用心理学会」として開催したとおもいますが、種々名称、その他について論議があり、「日本応用心理学会」

の名はよく熟さない内に学会の総合が行なわれたのですが、その総合を学会にかけられない状況で、戦争が敗戦に向って進行したのです。(心理学研究16巻193-4頁参照) 古賀付記

児玉 あれは終戦後だな。

古賀 終戦後は違う。終戦前の話ですよ、合併は。広島でやったのが最終会で、昭和12年が京城の日本心理学会ですから昭和11年です。広島での合併後、日本応用心理学会が東京であり、僕は出席している。この時種々議論が出て、遂にまとまらなかったのです。それで戦前とも言えるし、戦後とも言えるでしょう。(古賀付記)

児玉 いや、先生、もう1回合併しているよ。関西だったな。僕がこんがらがっているかな。関西で終戦後、もう1回合併の大会をやっている。あれはいつも合併合併を言って、ほんとは合併していないんだ。

古賀 学会だけ合併で、どちらの方の人も出るということ。

児玉 そのくせ話合いだけは合併しますと言って、フタを開けると、関西は関西応用心理学をやって、東京の方は日本応用心理学をやっている。実質的には合併していない。

古賀 学会だけを一緒にしている。だいたい人間がオーバーラップしていて、はっきりわけられないですよ。

太田垣 日本応用心理学会と名が付いたのは、終戦後ですか。

古賀 昭和11年ですから戦前です。合併以前から、東京で総合の問題で大分論争があり、16年の心理研究を見ると戦争ではっきり総合を開いて決定するに至らなかったようです。その間東京で種々議論が横行して、実質的に総合されなかった。それは終戦後にもち越されることになったでしょう。

児玉 終戦後です。初めは応用心理学会とだけ言っていたんですが、「これはいかん、日本をつける。」と言って、渡辺先生はつける必要はないと頑張ったんだが、僕ら若い方がやれやれと言って意見を押しきっちゃったんだ。それから日本がついた。

古賀 慶応の日吉でやった時は何ですか。

太田垣 あれは日本応用心理学会でした。

古賀 日本ですか。それに僕も出たことがある。戦争中ではなかったかと思えます。

太田垣 それは知りません。戦争に行っていましたから。

古賀 終戦後、初めて応用心理学会があったのはどこかな。

児玉 日大です。

大村 応用心理学会をやったのは内ですがね。復興第1回です。その時にはまだ日本はついてなかった。

児玉 日本がつくようになったのは、その後だよ。

古賀 それは世田谷でやった？

大村(政男) いいえ、三崎町の日大本部を借りてやったんですよ。

古賀 その時に入学試験と成績との関係なんていうことが問題になったな。

大村 あれは日本心理学会でしょう。

古賀 それから一度、都立大学かなんか向こうの方でやったことがあるでしょう。終戦後。

堀内(敏夫) 学芸大学でやったことがあります。その時私が事務局長をやってまして、坂本先生が会長で、その時日本はついていたと思います。26、7年頃です。

児玉 その時はついていたよ。終戦後、わりと早くついた。

古賀 僕は25年にアメリカに行った。その前に東京でやったことがあると思うが。

堀内 先生が名古屋高商にいらしゃった頃、名古屋の出身で、飯沼龍遠、飯沼先生はもう台湾に行っちゃったんですか。

古賀 飯沼龍遠は、大きいお寺を持っていたんですよ。台湾に行ったのは力丸ですよ(記録によると成程飯沼君は台湾に行っていた)。

堀内 力丸先生が助教授で、飯沼先生が教授だったんです。

古賀 力丸は、熊本の五高におった。ふたりとも仏教関係だったな。それから広島高等学校にこられたかとおもいます。それから台湾に。

堀内 飯沼先生も力丸先生も日蓮宗です。力丸先生は、飯沼先生が早く引上げられてから教授になられまして、終戦後、引き上げ前に、向こうで交通事故で亡くなったんです。お気の毒に。(力丸君の子供は終戦後熊本にいたようです。あとで早稲田大学に行ったようですか。どうなりましたか。古賀付記)

太田垣 松村先生が事務局長の時に作られた名簿に、第1回、終戦後1946年に日本大学でやって、それが3月ですね。それから10月に慶応でやった。その時、日本が正式についていたかどうかはわかりません。

児玉 僕が第4回に日本女子大でやった時は、日本がついている。

太田垣 日本女子大、それから明治、東京女子高等師範……。

児玉 論文集は、十何回かまでは印刷になっていない。

古賀 僕の時分は、僕の記憶では、昔の関西応用心理学

会を名古屋でやった時は愛知教育という雑誌一卷をあげて、学会のことで費やしたんですよ。それから兵庫では、兵庫教育というのがあって、その一卷を費やして、学会の報告を集めたわけですよ。どこか捜せばあると思います。

児玉 論文集を見ると、ある程度いろんなことがわかってくるな。

大村 それから、人間科学という雑誌があったでしょう。あれは4号まであるんですよ。あれに詳しいですね。

児玉 あれを見りやいいな。

大村 1回から13回までのプログラムを集めて印刷したのがありましたね。

児玉 それまでは、発表論文を集めたものはない。

大村 おもしろそうな物だけが、人間科学に出ているんですね。

児玉 あの時は1年に2回だったから、十何回というのは6年目だな。

大村 Japan Association of Applied Psychology という名前は、先生がつけたんですか。

児玉 僕がつけた。(テープ終了)

### 編集者あとがき

昭和50年3月15日、慶応義塾大学三田において開催された、日本応用心理学会常任運営委員会の席に、古賀行義先生をお招きし、学会の創成期のお話を伺う機会を得た。貴重な資料として記録にとどめておくことが必要であると考えて、先生のお許しを得て本誌に掲載することとした。一応先生に速記テープの原稿にお目にかけて加筆訂正していただいた。先生御自身としては充分ではないとお考えになっていたようで御不満の点はあるかと存ぜられますが、お話しニュアンスを出来るだけとどめたくあえてそのまま掲載させていただくこととした。失礼にわたった点はお許しいただきたいと思います。他の資料との照合、確認等は又別の機会にゆずりたく、とりあえず生の資料として集録させていただくこととした。これについて読者でお気づきの点。あれば編集部までお知らせいただければ幸である。

日本応用心理学会は史的にみてかなり複雑なおい立ちを持っているようであるが、他に委しい資料が整備されて完全な学会史が編まれることが期待される。本資料はそのために貴重な情報を与えるであろう。